

タイトル	献辞
著者	魚住，純；UOZUMI，Jun
引用	北海学園大学学園論集(181)： i-iii
発行日	2020-03-25

献 辞

工学部長 魚 住 純

山ノ井高洋先生は、本年 3 月 31 日をもって退職されることになりました。学園論集第 181 号が退職記念号として発行されるにあたり、ひとこと送別の辞を述べたいと思います。

山ノ井先生は、1976 年 3 月に北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程を終了後、1979 年 3 月に同研究科同専攻博士課程を単位取得満期退学され、同年 4 月に北海道大学工学部情報数理工学第 1 講座に助手として配属・勤務されました。その後、1982 年 9 月に工学博士（北海道大学）の学位を取得され、1984 年 8 月から 1 年間、フランスのボルドー第 1 大学 GRAI 研究所にて客員研究員を務められました。

北海学園大学工学部には、1987 年 1 月 1 日に助教授として赴任され、すでにその数年前に工学部に着任していた三浦良一教授および前年の 10 月に着任していた牧野圭二助教授（いずれも当時）とともに、電子情報工学科創設に向けての準備に携われました。そして、同年 4 月 1 日に電子情報工学科が開設となり、新築された 2 号館を中心として始動した同学科の主要メンバーとして活動されました。その後、1989 年 4 月に教授に昇格され、1991 年の大学院工学研究科電子情報工学専攻修士課程、その 2 年後の同博士（後期）課程の創設にもご尽力されました。この修士課程開設に際して 2 号館の 7、8 階が増築されており、山ノ井先生はその 7 階を拠点に大学院生の指導に当たられました。さらに、後述するように、山ノ井先生は、生命工学科の創設に際しても工学部長としてご尽力され、2013 年の学科設立と同時に生命工学科に移籍されています。そして、その 4 年後には、生命工学科卒業生の進学を可能にするため、大学院修士課程の電子情報工学専攻が電子情報生命工学専攻に改組転換され、さらに 2 年を経て、博士（後期）課程も同様の専攻への転換がなされましたが、山ノ井先生はこれら大学院新体制の発足にも大きく貢献されています。

学部教育では、電子情報工学科においては、応用数学Ⅰ・Ⅱ、情報数理工学Ⅰ・Ⅱ、情報数理工学演習、情報理論、電子情報工学実験実習、卒業研究などの科目を担当され、生命工学科に異動されたのちは、情報数理学Ⅰ・Ⅱ、情報数理学演習、情報理論、プログラミング実習、卒業研究などの科目を担当されました。また、大学院においては、電子情報工学専攻および電子情報生命工学専攻の修士課程と博士（後期）課程において、視覚情報工学特論、数理工学特論、視覚情報工学特別講義、およびそれぞれの専攻における特論ゼミナール、特別研究、特殊研究を担当されてき

ました。その間、10名を超える修士課程と5名の博士（後期）課程の学生の指導を担当され、大学院における研究指導にも多大なる貢献をされています。

学内の委員としては、電子情報工学科時代には電子情報工学科の、そして生命工学科移行後は生命工学科の学科主任を務められたほか、就職委員、入試委員、予算委員等の学内委員も担当されてきました。2002年から2005年までは入試部長を併任され、この間に2年連続して発生した入試問題の出題ミスに対して、文部科学省への適切な報告と迅速な対応をとられました。出題ミスに対するその対策法は、後任として入試部長を務めた私自身にとっても重要な指針となり、その後の歴代入試部長が踏襲する入試部の対応マニュアルとなっています。さらに、2009年からの3年間は工学部長を併任され、この間の文部科学省との粘り強い折衝が、2013年の生命工学科設立へと結実しています。

研究活動においては、本学着任後、多変量統計学の理論と応用、錯視現象の数理工学的把握等のテーマで精力的に研究を展開されました。さらに、北海道大学応用電気研究所（現電子科学研究所）との共同研究を行い、3次元有限要素法を用いた人工膝関節の設計等のバイオメカニクスに関する研究、アイマークカメラを用いたヒト視覚の研究等、人間工学的な研究分野へとテーマを展開されてきました。工学研究科では、建設工学専攻が担当する「学術フロンティア事業」と電子情報工学専攻が担当する「ハイテク・リサーチ・センター整備事業」が1998年から5年間の私立大学学術研究高度化推進事業に採択され、この補助金により、1999年に3号館が、地下1階地上2階の工学研究所として竣工しました。なお、この3号館は、前述の生命工学科の開設にあたって、その翌年に5階まで増築されています。ハイテク・リサーチ・センター整備事業は、2003年からさらに5年間継続され、先生は、その10年間にわたってプロジェクトの研究員として参画し、研究を推進されました。さらに2008年からの5年間は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の研究員および事業の代表者として参画しました。この後継のプロジェクトにおいても、研究を実施する組織にハイテク・リサーチ・センターの呼称を使っていますが、通算15年間にわたるハイテク・リサーチ・センタープロジェクトにおいて、先生は種々の視覚刺激に対する脳波の解析を中心に研究を展開されるとともに、電子情報工学科の大西真一教授との間でAHP（Analytic Hierarchy Process, 階層分析法）に関する共同研究もされています。ハイテク・リサーチ・センターは、工学研究所の2階フロアにありますが、山ノ井先生の活動拠点である「視覚情報処理実験室」もその中であって、15年間のプロジェクトが終わった後も、いつも学生や学外の共同研究者が出入りする大変活発な研究室でした。先生は、1999年から1年間、本学の在外研修としてフランスのエク・マルセイユ第2大学医学部医用情報研究所に赴き、同研究所のDr. Elie Sanchez氏と共同で、脳波解析とファジィ理論の研究を行っていますが、これら一連の基礎研究は、近年の先生の主要な研究テーマである、脳波を検出してロボットを制御するBCI（ブレイン・コンピュータ・インタフェース）の研究へと展開されています。BCIは、体の不自由な障害者にとっての夢をかなえる突破口となる技術であり、先生はその貢献により国内外の国際会議に

において多くの招待講演をされています。

山ノ井先生は、本学で開催された 2006 年第 22 回ファジィシステムシンポジウム、2012 年国際会議 ISCIIA、および 2017 年国際会議 SCIS & ISIS2017 において実行委員長を務められたほか、2014 年国際会議 APRAM2014（北海道大学）および 2014 年国際会議 IEEGrC2014（北海道登別）でのキーノート講演など、多くの学会・国際会議において要職を務められています。所属学会は、日本知能情報ファジィ学会、IEEE、米国 Neuro Science 学会、カナダ Neuro Science 学会、電子情報通信学会、情報処理学会、生体医工学会、計測自動制御学会、日本行動計量学会、形の科学会等と多岐にわたり、いずれの学会においても精力的に活動されてきました。これら長年の貢献に対して、2007 年および 2017 年に知能情報ファジィ学会貢献賞を受賞、2018 年に韓国 ISIS2018 においても貢献賞を受賞されています。さらに同年、数回にわたる北海道支部長就任と貢献賞受賞に対し、知能情報ファジィ学会功績賞の受賞もされています。また、本学工学部から毎年奨学生が選ばれる公益法人山口正栄奨学財団において、2015 年から評議員を、2018 年から評議委員長、2019 年から理事を務められています。

このように、山ノ井高洋先生の本学における 33 年余りにわたる教育、研究、そして学内外の諸活動での貢献は極めて大きく、本学の発展に多大な功績を残されたことに対して、心より敬意を表します。今後とも、本学の発展にむけてご指導ご鞭撻くださいますようお願いするとともに、先生のご健勝をお祈りして、私からの献詞とさせていただきます。

